



No. 35

1993年3月発行

# 新潟県支部報

私のフィールド

## 柏崎海岸

柏崎市 末崎興助

柏崎から国道352号線を車で10K走り、刈羽トンネルを抜けると突然視界が開けて大湊海岸に出る。砂浜に立つと、洋々たる日本海の彼方に佐渡の島影を望み、右手には椎谷岬の白い燈台が目映る。左手には秀峰米山がそびえ立ちその裾を長く海に伸ばしている。晴れた日には、遥かに妙高三山と西頸城の山々も一望に出来る大パノラマである。

砂丘地より湧き出した澄んだ水が小川となって海に注ぐ辺りに水溜りが有り、そこで秋の渡り途中のシギやチドリがよく観察された。その頃の私にはどれもこれも珍しく、ハイイロヒレアシシギ等、種類により異なる動きをするのも面白かった。特に嘴の長いホウロクシギには感動させられた。この良き学習の場も隣接地に原発が建設されて以来、付近の環境は一変して訪れる鳥は激減してしまった。

荒浜ではミヤコドリを発見した。赤い嘴と足、それに黒と白のコントラストが心憎い。

鯖石川左岸には葦原があり、渡り鳥の休息地となっている。標識調査の二級ステーションにも指定されていて、時々手伝いに行くがとても参考になる事が多い。春はオオヨシキリの囀りから始まる。ヤツガシラを見て感動したこともあった。夏の夕方、時に集まるツバメをコチョウゲンボウが素早く捕えたのには驚いた。秋にはチゴハヤブサも飛来した。冬

はカモ類も多く四季を通じて楽しめる場所だ。

鵜川河口ではウミウが泳ぎカモメが群れている。時にはミサゴのダイビングやハヤブサが姿を見せることもある。沖合にクロガモやビロードキンクロの姿を見るとほっとする。

厳冬の大しけの日は心が弾む。港に避難して来るウミアイサ、シノリガモ、アビ、オオハム、ウミスズメ、ウミガラス等、珍鳥に出会う楽しみがあるからだ。近年は暖冬続きで打率低調で困っている。最近ではコクガンの姿を見る機会が多くなった様に思う。5月にハジロカイツブリの夏羽を見た。赤い目と、金色の飾り羽がとても美しく印象的であった。

東の輪海岸に鳥岩と呼ばれる岩があり、いつもウミウが羽を乾かしカモメが休んでいた。大好きな景観であったが、ここにマリーナが建設されて、豪華なヨットやボートが並んでいる様を見るとやり切れない思いがする。

私のフィールド柏崎海岸は大きく変貌してしまったが、時には素晴らしい感動を与えてくれる。一昨年5月福浦でグンカンドリに出会った。燕尾とその大きさからとっさにそれを判断して夢中でシャッターを切った。僅か30秒程の出来事であったが、興奮は極限に達していた。あの迷子のグンカンドリは、南海の故郷へ無事に帰り着くことが出来たのだろうか。

# 長岡市内におけるカラス科2種の営巣分布について

長岡野鳥の会\*

## はじめに

カラス（ここではハシボソガラスとハシブトガラスの両方をさす）は、私達の身近に生活する鳥として、スズメと共によく知られている。その巣もまた、私達の生活する地域内に多く作られ、市街地の中にも希ではない。ところが、これまで特定地域内（例えば市町村や集落など）におけるカラスの巣数が調べられた例はきわめて少ない。これは、その地域内で発見される巣が、はたして全体のどの位の割合であるのか、調査例が少ないだけにその成果に疑問があるためと思われる。またあまりにも身近な鳥であり、研究者などの興味の対象にならないということも考えられる。

しかし、カラスは繁殖期にはしっかりとした縄張りを持つこと、木の葉が繁る前の早い時期に営巣することが多く、巣が発見し易いこと、また、カラス自身が目立つ鳥であり、誰もがよく知っていること、などの点から、特定地域内における巣の発見率はかなり高いのではないかと考えられる。

そこで、筆者らは1983年に長岡市内におけるカラスの巣の数とその分布を調査してみた。その結果、巣の数や分布と併せてこれまで知られなかったハシボソガラスとハシブトガラスの巣数の比較や営巣環境などについても明らかにすることができた。この種の調査データは年数を経て再度調査するときに貴重になると思い、すでに古い調査になったがここに結果を報告することにした。

この調査には長岡野鳥の会の会員をはじめ地元の多くの人たちに協力をいただいた。厚くお礼申し上げたい。

## 調査方法

本調査は1982年の予備調査を経て1983年に行った。調査は長岡市内を全部で8ブロックに分け、各ブロック内に居住する会員が代表調査員となってブロック内の巣をすべて発見することにした。調査は巣が見つかりやすい3月から開始し、発見したときには、その地所、巣の架設物（樹木ではその樹種）、カラスの種類を記録した。また、発見した巣のいくつかについては地上から巣までの高さについても測定した。

## 結果と考察

### 1. 巣の数と分布

今回の調査で報告された確認時期を見ると3月12日から5月22日までの範囲にあるが、5月に入ってからの新たな発見はわずか9巣で、他はすべて3月と4月に発見されている。中でも4月中の発見が全体の82.1%をしめた。

さて、発見された巣数は合計140巣であった。そのうちハシブトガラスの巣数はわずか5巣、種不明の巣が同じく5巣で、その他はすべてハシボソガラスのものであった。このような結果は、ハシブトガラスはハシボソガラスに比べて山中に多い傾向があることも報告されていることから、今回の調査が山中まで詳しく調査されなかった点を考慮しても、長岡市内ではハシボソガラスが圧倒的に多いことが明らかになった。

\* 調査者：井口 忠、大島 基、太田 実、  
高綱 勉、田中 靖、塚越雍英、  
西沢一郎、渡辺 央、\*(※執筆者)

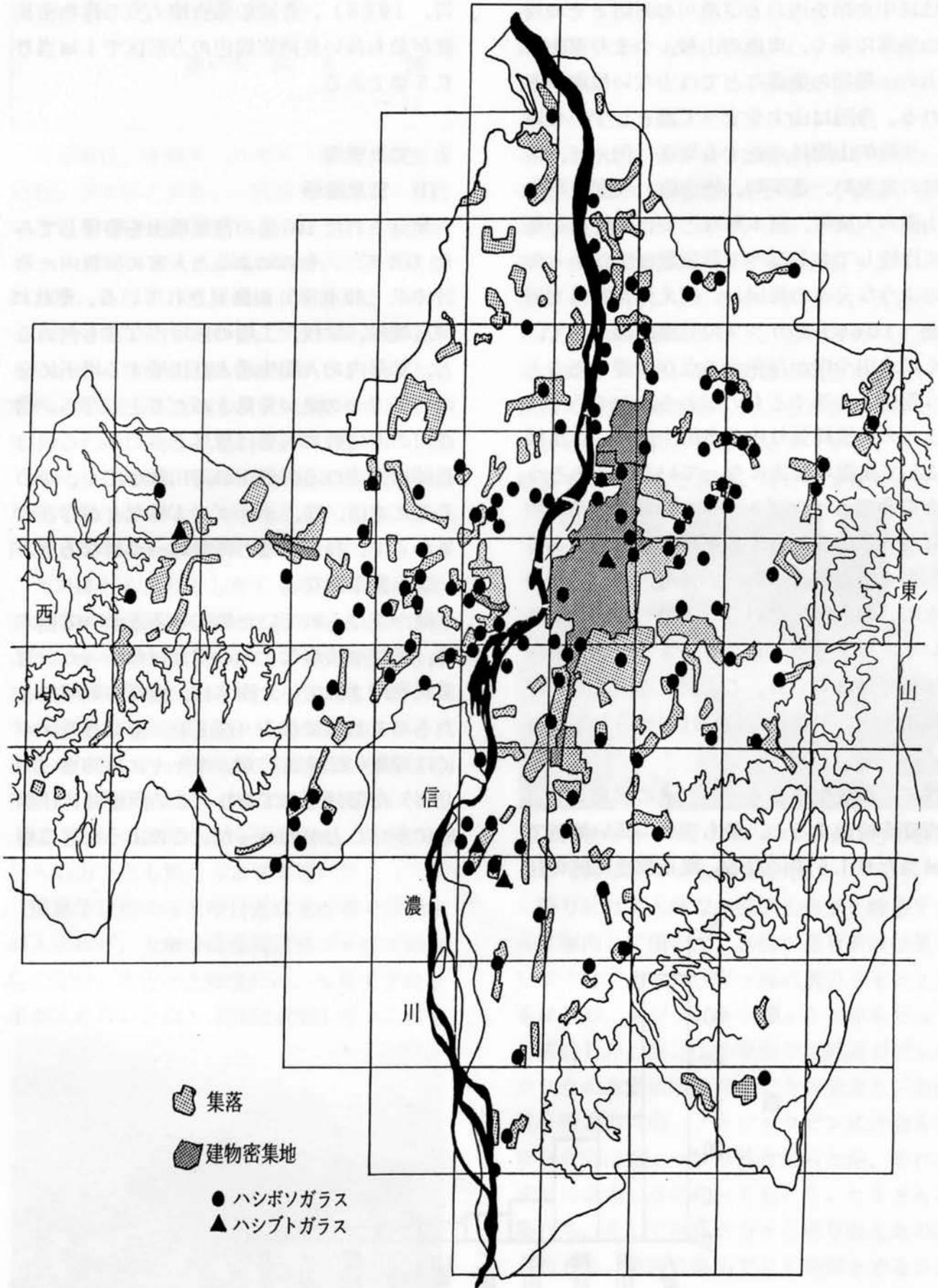


図1 長岡市内におけるカラスの巣の分布

それらの巣の分布を図1に示した。巣は市のほぼ中央部を流れる信濃川の河辺とその周辺の集落に多く、東西の山稜、つまり東山、西山の山麓部の集落などでは少ない傾向がみられる。今回は山中をすべて調査していないが、比較的山間に点在する集落、例えば、東山側の濁沢町、蓬平町、栖吉町、成願寺町や、西山側の大積町、宮本町などでは平野部の集落に比較しておしなべて営巣数は少なかった。このような分布の傾向は、例えば長野県で羽田他(1965)がカラスの営巣環境として、近くに水田や畑が存在する点が重要であるという報告と共通するものがある。おそらく、カラスの繁殖縄張り内の水田や畑は、採餌場所として重要な要素になっているのであろう。

ところで、ハシボトガラスの巣の分布場所を見ると、信濃川近くの平野部の集落である上前島と青島町、市街地の長町、西山山麓の宮本町、親沢町にそれぞれ1巣ずつ発見されている。つまりハシボソガラスとはほとんど同じ地域に巣は見られ、この営巣地域を見る限り特に本種の特徴的な傾向は認められなかった。

次に、調査地域を4km<sup>2</sup>方形区に区分して営巣密度を検討すると、最も密度の高い地域で、1km<sup>2</sup>当たり1.5巣になる。東京都墨田区の住

宅密集地帯では1km<sup>2</sup>当たり0.5巣であるが(山根, 1988), 今回の調査地のうち建物密集度が最も高い長岡駅周辺の方形区で1km<sup>2</sup>当たり0.5巣である。

## 2. 営巣環境

### (1) 営巣場所

発見された140巣の営巣場所を整理してみた(図2)。それによると人家の屋敷内に合計60巣(42.9%)が発見されている。それに神社境内、学校、工場の敷地内なども含めると、集落内の人間生活と直接接する場所に全体の65.7%の巣が発見されたことになる。信濃川の河川敷にも巣は意外と多いが、これは長岡市を流れる信濃川の河川敷が広く、かつそこに水田、畑、オニグルミ林などが存在するからで、長岡地域の特徴の一つになる。

### (2) 営巣樹など

巣が架けられていた物をみるとすべて樹木で、電柱や鉄塔などへの営巣はなかった。営巣に利用されていた樹木は、樹種の判明できたもので17種になる(図3)。そのうちスギには32巣(22.9%)が、ケヤキには28巣(20.0%)が架けられており、この両樹種に圧倒的に多いことがわかった。このような営巣樹

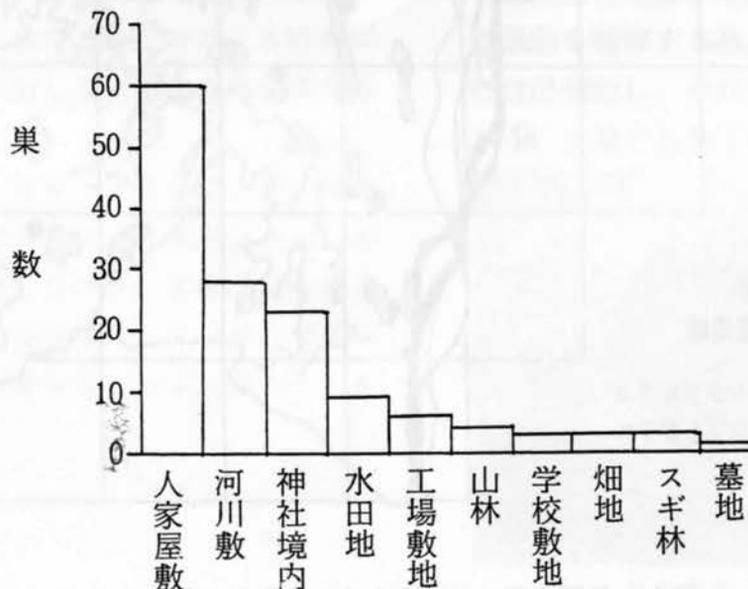


図2 カラスの営巣場所と巣の数

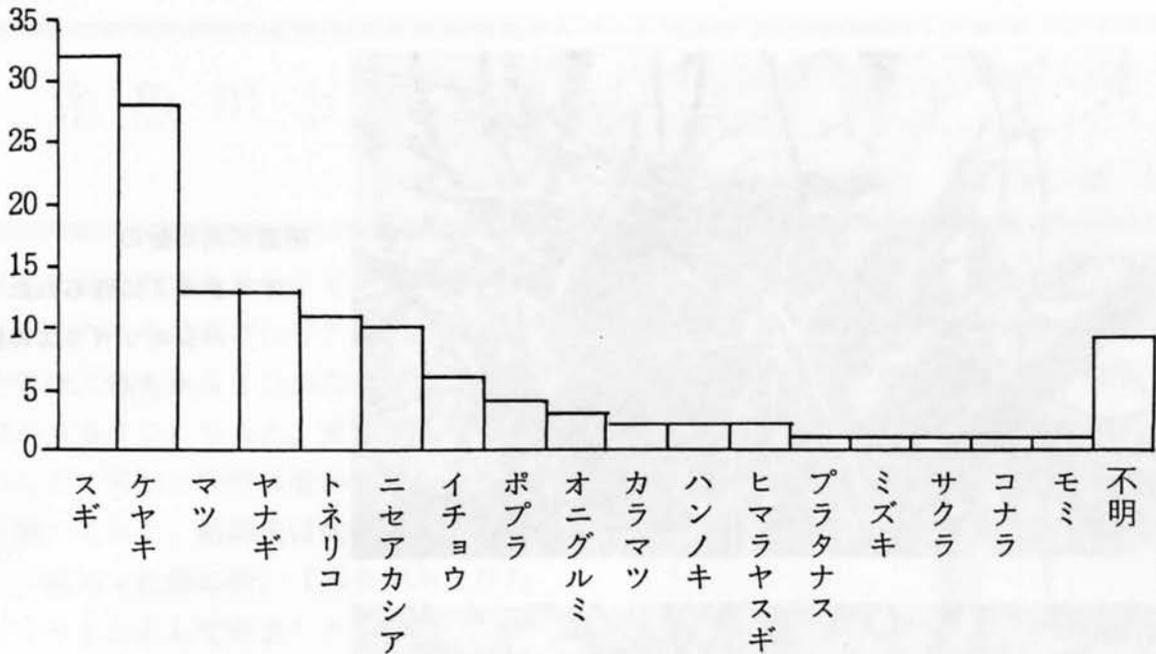


図3 カラスの営巣樹と巣の数

についても地域的な特徴がみられ、長野県の更埴市ではアカマツとケヤキに多い(羽田, 1965)。

スギもケヤキも前述した人家の屋敷内や神社境内に多く、しかも高木になる点で共通している。今回の調査で25巣について地上から巣までの高さを調べているが、人家のケヤキに架けられた巣(11巣)の高さは平均11.8mである。これに対して信濃川河川敷の営巣樹をみると、ヤナギ、ニセアカシア、オニグルミに巣が多く、これらに架けられた巣(11巣)の高さは平均4.5mである。しかし、周りが平坦な河川敷ではこれらの樹木は目立つ存在

であり、集落内のスギやケヤキなどと同じ意味を持つものであろう。以上のことから、カラスは営巣に縄張り内のよく目立つ、高い樹木を選考することが窺える。

なお、ハシボトガラス5巣の営巣樹をみると、スギに3巣、マツに1巣、カラマツに1巣で、いずれも針葉樹であった。しかし本種が営巣に当たって特に針葉樹を選択的に利用しているかどうかについては、本調査だけでは例数が少なく、その結論はだせない。



ケヤキに作られた  
ハシボソガラスの巣



信濃川河川敷の  
オニグルミに作られた  
ハシボソガラスの巣



信濃川河川敷の  
ヤナギに作られた  
ハシボソガラスの巣

## ま と め

1983年の古い調査であるが、長岡市内におけるカラスの巣数と分布、営巣環境などについて報告した。巣は合計140巣を確認したが、そのうちハシボソガラスの巣は5巣に留まり、種不明の巣を除いても残りの130巣(93%)はハシボソガラスの巣であった。営巣密度は市内中心部の信濃川流域に点在する集落などで高く、周辺部の東山や西山山麓部の集落などには少なかった。建物が最も密集する長岡駅周辺にも巣は発見されたが、このような地域の営巣密度は東京都墨田区の建物密集地の場合と同様で、1ha当り平均0.5巣であった。

営巣環境をみると、巣は集落内の人家屋敷

内に最も多く、営巣樹はスギとケヤキが最も多く利用されていた。

この調査からまもなく10年になるが、巣数や分布に変化があることも予想されることから、再度同様の調査を行いたいと思っている。

## 参考文献

- 羽田健三・飯田洋一(1965)ハシボソガラスの生活史に関する研究1,繁殖期,鳥類の生活史(羽田編),410~418.  
山根茂生(1988)下町のハシボソガラスの繁殖生態,都市に生きる野鳥の生態,都市鳥研究会編,71~73.

# 北海道探鳥四人旅

伊藤 定市

夏が来れば思い出す……。昨年ので今さらの感があるが、脳裏に多少でも残るうちに北海道探鳥行について書きとめてみた。

たまたま日本鳥類標識協会全国大会がウトナイ湖で行われるのに参加したので、せっかくの機会だから風蓮湖で行われるエキスカッションにも参加し、前後の調整日には大雪山へも登ってみたいと夢をふくらませた。

一行は標識協会員でもある小松吉蔵、渡辺範雄、山本明の3氏と私の4人である。

発起人は小松さんと山本さん、大会本部との連絡は山本さん、資料準備は小松さんと渡辺さん、カーフェリーの申し込みと連絡は私が分担して準備を進めた。

## 日程とコース

- 7月20日 新潟港発(新日本海フェリー)→  
 21日 小樽港着→大雪山旭岳温泉→姿見平→旭岳頂上  
 22日 旭岳温泉→帯広→釧路→根室  
 23日 風蓮湖・春国岱探鳥  
 24日 ハボマイモシリ島で標識(11人)  
 25日 風蓮湖ステーションで標識  
 26日 根室→襟裳岬→ウトナイ湖  
 27日 ウトナイ湖探鳥、標識大会  
 28日 ウトナイ湖標識大会→札幌  
 29日 札幌→小樽港→  
 30日 新潟港着解散

経費 約11万円

道内移動は山本さんのドミンゴ。運転は山本さんと私。

宿泊は往復の船中2泊。旭岳温泉白樺荘1泊。根室では民宿風露荘4泊。ウトナイ湖レイクホテル2泊。札幌で小松さんの親戚1泊で、計10泊。経費を節約しながらもアットホームな北国の宿であった。

## 新潟 — 小樽

海上は平穩、船は大きい。日中は甲板から海上を眺めて暮らす。鳥影は極めて少ない。港内にはウミネコ、アオサギ、イワツバメなどを認めたが、港を離れるとウミネコの姿もまばらになり、ごく稀にシロエリオオハム、オオミズナギドリを見たぐらい。

小樽港着は電燈の光もまばゆい薄明。

## 小樽 — 大雪山旭岳温泉

急に高速道路に出たら、アイドリング不足で車がノックして不安であった。速度を落として回復を図る。旭岳温泉は標高1070m、白樺荘に入る。木の香も新らしいログハウスの新館2階に到着き、一服して旭岳登山に向う。

宿のまわりでミソサザイ、ウグイス、ハシブトガラス、ベニマシコ、ニューナイスズメ、ハクセキレイなどを見る。ベニマシコの鮮やかな色に、一瞬「すはノギンザンマシコか」と色めき立った一幕もあった。繁殖期の雄の美しい色に、まずは北海道を実感した。

旭岳温泉→姿見池→旭岳頂上(2290m)

宿から5分位でロープウェイ駅。さらに15分で1600mの姿見駅に上り姿見平のお花畑の中を歩く。エゾコザクラ、チングルマ、メアカンキンバイ、イワブクロ、エゾツガザク



姿見平で(旭岳頂上は雲の中)

ラなどがハイマツ帯の間に咲き競い、ノゴマ、ビンズイ、カヤクグリ、ルリビタキなどが縄張りを主張してさえずる。

姿見の池の右側をまわって旭岳の裸の稜線を急登する。ホシガラスの声を耳にガスに包まれた頂上を目指して息を切らす。運動不足を後悔するが今さら間に合わない。12時52分に頂上の一等三角点を踏んだ。月並だが標柱を入れて記念撮影。昼食の間に地元のアマチュア無線局と交信した。これも記念の足跡だ。

ガスで眺望ゼロだったのに心を残し、同じ道を下って再び姿見平の散歩を楽しむ。カメラを鳥に花にと向ける。ボランティアの指導員がいて煙草の吸殻やガムの包紙まで拾っている。こうした善意で美しい自然が守られているのだと胸が熱くなる。話しかけたら、親切に同行案内して花の名や大雪山系の道程、道標の見方など柔和な語り口で説明してくれた。ハギマシコは姿見駅のごみ焼場附近でも見たということであったが、私共4人には姿を現してくれなかった。精進が悪かったか、お祭りが足りなかったか、と変に納得。

温泉駅に降りてからビジターセンターを見学して学を深めた。



クマゲラと巣穴(ビジターセンターで)

#### 旭岳温泉 — 根室

早朝出発して長駆500km余りを根室に向う。深山峠のラベンダー園で夜が明ける。一面青紫の向うに残雪を戴いた大雪の山々がどっしりと居据わっている。雄大の一語につきる。釧路で鶴居村に入り市立釧路湿原展望台に寄

った。展望館を参観してから屋外遊歩道を一巡する。林内に木道が設けられ、約1時間半かけて2.5kmを歩いた。いくつかの展望台が設けられ、眼下の湿原を見渡せる。育雛中のタンチョウなど4番い、アオサギのコロニーも確認できた。木道の周囲はアオジ、アカゲラ、ウグイスなど。館に戻って昼食し、根室へ向う。早朝04:17に旭岳温泉を発し、運転交替2回ずつで15:00に根室に着いた。

#### 民宿「風露荘」

オーナーの高田さん一家に温かく迎えられて荷を下ろす間もなく、宿の附近を探索する。ほんの20分ばかりの間にアオジ、ベニマシコ、アカゲラ、コゲラ、アマツバメなどが次から次へと現れて、蚊に刺されているのも気づかぬ始末であった。

明るい中に風蓮湖を覗き、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ウグイス、カッコウなどを見て来る。大きな成果に明るい前途を祝しての乾杯には高田さんのご家族も一緒。

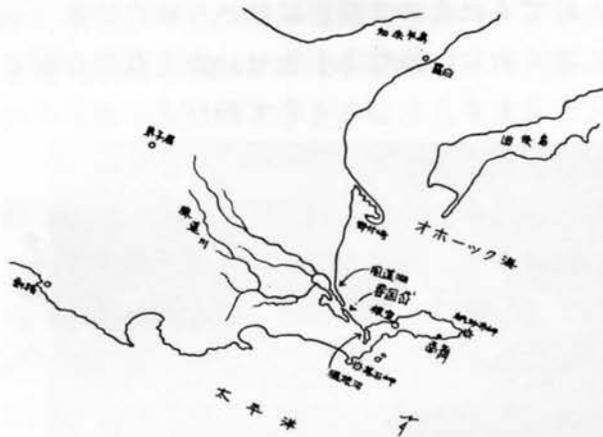
食卓に並んだ数種類のジャムは野生の実を摘んで作ったという。副食・パンも自家製。食堂の板壁一杯に描かれたオジロワシの絵には叶内拓哉さんのサインがあった。絵の上には天上から純毛のチョッキや帽子が吊ってある。綿羊を飼って毛を刈り、紡いで草木染にし、シマフクロウやシロハヤブサ、オジロワシなどを編みこんだオール自家製。すっかり感嘆して早速買い注文。予算オーバーして後で郵便局に寄り、カードで預金をおろした。それにしても一泊2食で5000円は安い。



民宿「風露荘」の壁画

風蓮湖・春国岱

「ニムオロ」＝「樹木の繁茂する所」が根室の語源であるという。ヒグマが巨大な口をあけて国後島を呑み込もうとしている。上顎が知床半島、下顎の先が納沙布岬。その下顎の付根の唾腺が風蓮湖で、オホーツク海との境の砂嘴が春国岱だ。砂浜、砂丘、草原、湿原、広葉樹林、針葉樹林、干潟など変化に富み、入口近くに駐車場がある。コースは「日本の探鳥地 777」に紹介されている通り。



根室 (風蓮湖・春国岱・納沙布岬)

朝食前にまた風蓮湖「白鳥台」へ行く。ドライブインや展望台があり、探鳥コースは整備されている。林の中から水際の木道を一巡。山林・野原・湿地それぞれに棲む鳥が1 kmも歩かぬ中に27種も観察された。お目当てのタンチョウは14羽。無数のシギ類は逆光と遠距離で判別できないが、ピューイッという声はキアシシギだ。小型のものも含め数百羽。

「エゾシカだ」と小松さんの声。望遠鏡の先の草むらからこちらを見ている。300 m位離れたまましばらく対面。その途中にいた山本さんは全く気付かず、後で口惜しがること。



風蓮湖 (タンチョウの親子)

春国岱で最も期待したのはクマゲラ。「今幼鳥の訓練中だから会えるでしょう」という奥さんの声に心を弾ませて出かけた。

砂原の駐車場で車から出ると、右にオホーツク海の濃紺が、左手に風蓮湖の干潟が広がっている。オオセグロカモメの間にアオサギが10羽前後立ち陽炎に揺れている。少し離れてオジロワシが1羽羽づくろいしていた。キタキツネが1頭とぼとぼと一直線に歩いていく。息をつめて見ていたが争いは一つも起きなかった。水平距離は案外に大きかったかも。



春国岱の木道

木道が湿地から林内へと続いている。要所に手すりもついた広い木道だ。クマゲラの巣穴は林縁の枯木にあった。3 m位の高さであろうか。しばらく待ったが主の姿は見えず、帰りにもまた振られてしまった。雛の成長と共に訓練エリアを広げたらしいとのこと。

シマセンニュウ、オオジュリン、ミソサザイ、ヒガラ、ノビタキ、アオジ、オオアカゲラ、ゴジュウカラ、マキノセンニュウなどが自然林の内外で短い夏を忙しく生きていた。

砂州へ戻るとチシマフウロやハマボウフウが足もとに広がり、カワラヒワやコゲラが私たちと入れ替わりに展望台から飛び立った。



春国岱

### ハボマイモシリ島の初体験

オオセグロカモメの標識といったって、どうやって捕えるんだろう。素朴な疑問でずっと不安であった。メンバーは11人、歯舞漁港の昆布漁船で10分位乗って灯台のある小島に上陸。周囲300m位、標高7~8mか。汀近くからオオハナウドが密生した中で、数千羽のオオセグロカモメが営巣していた。2m位のハナウドを掻きわけて入ると、50cm間隔に1巣位の割合で浅いお皿型の巣がある。卵は2~3個、早いものは親に近い大きさから、まだ卵のものまで。手頃な大きさの雛をそっと上から抑えて足環をつけ、もとの位置に置くと、雛は逃げずに巣にうづくまっている。乱暴に扱って巣から離れると、他の親鳥に突き殺されてしまうのである。午前・午後約1時間ずつで500個の足環をつけた。コシジロウミツバメの標識やケイマフリの写真が撮れたのも初めての体験であった。海岸で流れ昆布を拾って土産に持ち帰った。



ハボマイモシリ島のオオセグロカモメ

根室 — 襟裳岬 — 苫小牧

風蓮湖ステーションでの標識作業の間に、ハシブトガラやタンチョウ親子をじっくり観察し、保護飼育されていたシマフクロウも見せてもらった。これは「ド迫力」。

帰りは帯広に寄らず襟裳岬をまわって苫小牧に向う。連日の疲れで、運転者以外はじきにうとうとする。十勝川河口近くで「オジロだ」と大声をあげて車を止めると、皆、急いで外へ出る。オジロワシは冬の新潟では珍らしくないが、今は真夏だ。「さすが北海道」

大いに感心して車に戻る。しばし睡気を忘れて話が弾む。

北海道の道路は広い。幅が広い訳でないが周囲が広いのだ。行き交う車が少ないのだ。自分だけ走っている感じである。また隣や後では舟を漕いでいる気配である。と……。

「タンチョウだ」の声で目パッチリ。左手の休耕田?にタンチョウ4羽。僅か50m位だ。そっと車を止める。まず車中で観察と撮影、次いでおもむろにドアの外へ。警戒して首をあげてくれたので撮影にはありがたい。「飛んでくれないかなあ」とせいたくな声が聞こえたらしく、しばらくして飛び去った。



タン  
チ  
ョ  
ウ

襟裳の岬は何もない……なんて歌われて可哀そう。眺めは良いし、花も鳥も昼食も楽しんだ。この後、苫小牧までは雨で何もない。

### ウトナイ湖

レイクホテルに2泊、標識大会に参加してエゾセンニュウ、アオジ、コブハクチョウに標識し、前後の余暇を利用してネイチャーセンター附近を探鳥。季節外れのため、シマアオジには会えなかった。



コブハクチョウを標識・放鳥

帰りの船中、4人の一致した言葉は「北海道。また来たいねえ」であった。 おわり

## 糸魚川市で繁殖したカササギ

糸魚川市 鷺沢澄雄

数年前に青海町でカササギを見て以来、時々糸魚川市内でも姿を見かけていたのであるが、昨年は、春先から私の勤務校の周辺で頻繁に見かけるようになった。常に単独で行動していたので繁殖の期待は薄かったが、一応周辺を調べてみた。結局巣は発見できずに終わったが、秋の文化祭の折、「糸魚川市に住む珍鳥カササギ」として発表した。



巣材を運ぶカササギ

今年の春、文化祭での発表を見てくれた父兄が、市内に営巣を始めた旨を知らせてくれたのである。4月3日、営巣場所であるNTTの建物を訪れると、2羽揃って巣造りに懸命であった。田村園芸の庭先や、駅構内から小枝を拾っては巣に運んでいた。巣は、パラボラアンテナの基部にあり、地上から約49mの高所である巣に戻る時は一度に舞い上がることはせず、鉄塔の中段に一旦止まってから、2～3回止り直しながら上昇し、巣に入るパターンが多かった。九州のカササギは、2月頃より巣造りに入り、3月中旬に産卵、4月上旬にはフ化するようであるが、糸魚川の場合は一ヶ月以上遅れており、4月下旬に産卵・抱卵に入り、5月中旬フ化、6月中旬に巣立ちを迎えた。巣が高い所にあることと、アンテナを支える鉄骨に阻まれて、巣への出

入り、ヒナへの給餌等、観察は思うにまかせなかったが、親鳥の行動から繁殖行動の進行状況を推察した。5月上旬には、隣のカラスがアンテナを訪れ、しかもカササギの巣から数m離れたところに巣材を運び始めて私達を

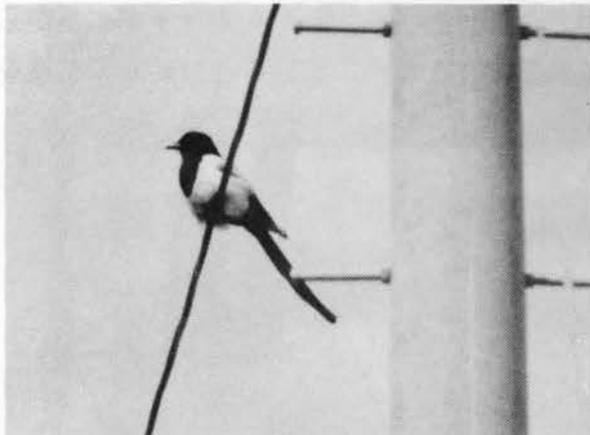


驚かせたが、強風に阻まれ思うように巣材が運べずあきらめた。真にカササギには天の助けであった。地域の人に聞いたところでは、5年前から毎年カラスはこのアンテナで営巣を続けており、カササギが巣として使っているものは、昨年までカラスが使っていたらしいのである。



5月中旬に入ると、巣に出入りする回数が増し、時には餌をくわえて巣に入るところも観察でき、トビやカラスに対すナワバリ防衛

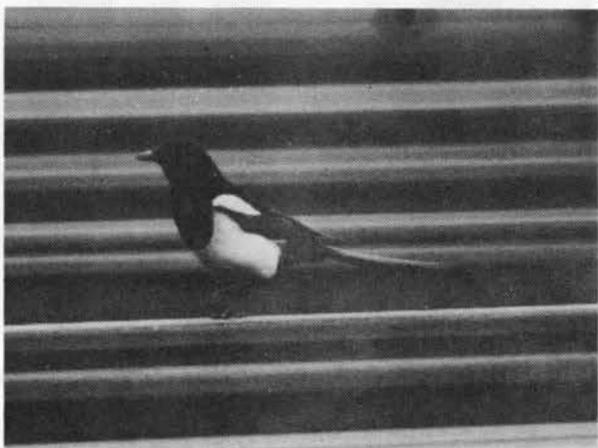
行動も強くなり、繁殖活動が順調に進んでいることが推察できた。トビが巣に近づくと、直ちに攻撃を開始し、100～200m追撃することが多かったが、カラスに対しては、にらみ合う場面は良くみられたが、飛翔中の相手に攻撃をかけることは少なかった。トビより機動性の勝るカラスは、空中戦においてカササギを上回るためではないだろうか。



電話線に止まるカササギ

雑食性であるカササギの餌は、木の実、昆虫、小魚、小鳥のヒナ……と様々であったがツバメの巣に近づき親鳥から攻撃を受ける場面も観察され、小鳥にとっては危険な存在と言えそうである。

6月上旬、巣の端に止り、はばたき練習をするヒナの姿がみられるようになり、中旬、無事3羽のヒナが巣立った。7月上旬までは巣を中心に行動し、親鳥もヒナにつかず離れず行動していたが、その後は、親と子を一緒にみることが少なくなった。3羽のヒナの内1羽は、巣立ち直後に親の後を追って、人家



近くの畑に舞い降りた時、ネコに襲われ食べられてしまったらしく、6月25日からは、2羽のヒナしか見られなくなった。カササギにとって、ネコは最も危険な相手であり、巣立ち前から親鳥はネコを警戒し、巣から200m程も離れた人家の庭先を歩くネコにまつわりつき、鳴き立て、威嚇した場面を目撃している。今は、糸魚川市に住む多くの人々がカササギの存在を知っており、あちらこちらから観察報告が寄せられている。それらから、ヒナは立派に成長し、市内の広範囲にわたって活動しているようである。来年の繁殖を心待ちにしている今日この頃である。

ご存知ですか？

### 「全国野鳥密猟対策連絡会」

カスミ網の販売、頒布や捕獲目的の所持禁止が1991年に実現したが、依然としてカスミ網による密猟は行なわれ、又猛禽類の密猟や小鳥の違法飼育、販売等の問題が後をたたない。このような密猟問題は、単に支部の問題として捉えていたのでは解決できません。全国の密猟問題に関心のある人々が情報を交換し、密猟を支えている野鳥の輸入禁止など、新たな法規制を求めて活動することを目的とした「全国野鳥密猟対策連絡会」にぜひご入会下さい。

☆年会費 個人会費 1口¥1,000

団体会費 1口¥1,000以上

(構成員数によって異なります)

個人会員募集中！一緒に密猟のこと等考えて下さる方歓迎。そして夏には徳島において開催される全国大会に参加しよう。資料請求は事務局まで。

京都市右京区宇多野長尾町1-3

中村 075-462-0680

「全国野鳥密猟対策連絡会」宛

代表 八木 昭

口座振替 京都4-45236

## 探鳥会報告

## 松之山探鳥会

神戸市 鈴木 博

92.5.30～31

5月30日、午前8:10発の「雷鳥」に乗り込む。ブナ林と夏鳥。一度探鳥に行ってみようと思っていた夢がやっとかなう。2年前のゴールデンウィーク、姪の結婚式で長岡を訪れた際、栃尾の「杜々の森」を訪れた。カタクリが可憐な花を咲かせ、ブナの新緑がまぶしい。そんな梢に色鮮やかなキビタキのさえざり。新潟日報社発行の「ブナ林へのいざない」を手にしてから、こころゆくまでブナ林で鳥見をしたい。そんな夢が新潟県支部の探鳥会でやっとかなう。昼過ぎ、直江津に着く。担当で幹事のYさんが出迎えてくれる。

天気はどんよりとしたくもり空。早速近くのブナ林に双眼鏡を持って出かける。カラ類とキビタキの出迎えを受ける。夕食後は地元松之山の村山暁氏から「松之山の鳥」についての講演と岡田成弘氏のカナダの鳥のスライドを見せて頂いた。懇親会では地酒を酌み交し、鳥談義に花が咲いた。神戸から来たということで、乾杯の音頭を取らせて頂き、新潟の鳥見人の方々とも親しくさせて頂いた。

探鳥予定地の深坂峠付近はまだ雪で自動車が入れられず、大蔵寺高原周辺のブナ林での探鳥に変更。ちょっと残念だが、5月末で自動車が入れないとは、「雪国新潟」をあらため



て実感。翌朝は4時起床、5時半から探鳥に出かける。心配した天気もくもり空ながら、雨は降ってはいない。早速、ヒリヒリと鳴きながら飛ぶサンショウクイがわたしたちを出迎えてくれた。カッコウとホトトギス、そして時々聞こえるツツドリの鳴き声がいやがおうでも、高原の雰囲気をつかめてくれる。遠くからはクロツグミの声。ホオジロとともに、神戸では聞けないノジコも競いあうようにさえざりしている。360度のパノラマ、天望台からは大蔵寺高原の全景と、参加者の一人が漏らされた「ああ、新潟の原点風景だ」という越後の山並みを満喫した。そこから向かいの尾根の枯れ枝に止まるジュウイチをじっくり観察することもできた。鳥だけでなくイワカ



ガミ、サンカヨウ、シラネアオイなどの数多くの可憐な花々にも出会えた。

帰りには美人林など松之山のブナ林をYさんに案内して頂いた。名前の通りそれは美しいブナ林であった。ブナ林の貴公子キビタキをはじめ、ノジコ、サンショウクイをじっくり堪能した。松之山小学校では間近でブッポウソウの求愛給餌を見ることができた。大満足。松之山の鳥、アカショウビンに出会えなかったのはちょっと残念だったが、それは来年のお楽しみに取っておこう。たくさんの鳥たち、そして同好の方々と巡り会えたのももちろん、神戸の裏山でよく見聞きするコジュケイが、新潟には棲息しないという話。新潟の自然の豊かさとともに冬(雪国)の厳しさも実感した探鳥会だった。

鳥合わせの結果 5:30~8:00くもり小雨  
 アオサギ, オシドリ, トビ, サシバ, コチ  
 ドリ, キジバト, ジュウイチ, ツツドリ, ホ  
 トトギス, カッコウ, アカゲラ, アオゲラ,  
 ヒバリ, ツバメ, イワツバメ, キセキレイ,  
 サンショウクイ, ヒヨドリ, ミソサザイ, ク  
 ロツグミ, ヤブサメ, ウグイス, メボソムシ  
 クイ, キビタキ, オオルリ, エナガ, ヤマガ  
 ラ, シジュウカラ, メジロ, ホオジロ, ノジ  
 コ, カワラヒワ, イカル, ニュウナイスズメ,  
 スズメ, ムクドリ, カケス, ハシボソガラス,  
 ハシブトガラス 合計 39種

探鳥会報告

太夫浜探鳥会 (10月18日)

事務局

本年度の秋季探鳥会は新潟市の太夫浜で行なわれました。ご存知のように太夫浜はオオタカの営巣場所としても知られており、今回はオオタカの繁殖に影響のない10月に探鳥会を実施しました。渡り鳥たちの姿も少なく、静かな林の中で夢中で種をつついているカワラヒワや、ホオジロ等の姿が見られ、魚をつかみ上空を飛ぶミサゴ、近くのカラスにモビングを受けて飛び出したオオタカを観察することができました。

(観察された鳥) オオハクチョウ, ダイサギ, ハシビロガモ, ウミネコ, ミサゴ, トビ, オオタカ, アカゲラ, ヒバリ, アオジ, ホオジロ, カシラダカ, ウグイス, メジロ, セグロセキレイ, ハクセキレイ, シジュウカラ, オナガ等, 24種。

探鳥会報告

朝日池探鳥会

新潟市 三 富 一 裕

92. 11. 29

秋季探鳥会 (10/18:新潟市太夫浜) には、佐潟 (新潟市赤塚) でのバンディング (標識調査) と重なった為参加出来ず、松之山での総会探鳥会 (5/30) 以来久方振りに県支部の各位とお目にかかれるのを、ここ2~3日間続いた冬將軍の去るのを祈り、楽しみにしておりました。

その祈りが通じたのか、当日の探鳥地 (朝日池) は、雲一つない快晴。コートの必要が無いほどに暖かく絶好の日和に恵まれました。カモメ類は沖に出てしまい、荒天が良いのですが、やはり快晴下での探鳥会は、何と言っても最高の天のプレゼントです。

当日朝、私の家からは1時間20分もあれば充分現地へ着けるのですが、早る気持を押さえ切れず7時に出発。あまりに早く着くのも、と思い、途中北陸道米山Pにて20分程時間調整8時40分頃、一番乗りかな?と考えながら到着、既に岡田・桑原・佐藤 (吟)・末崎の各氏らが待ちかまえておられ、米山Pでの調整を悔みつつ準備を開始。

私の当日の目標は、不得手なガン・カモ類の識別を勉強する為、可能な限り図鑑を片手に自己判別し、それを先輩各位に確認頂きながら、1種でも多く覚えて帰る事でした。



ヒシクイ (写真 佐藤吟一)

予定開始時間となり、小中学生等を含め約30名の方が集まり、副支部長の山本先生より探鳥のアドバイス戴いた後、岡田・桑原両氏より「水面採餌カモ類」と「潜水採餌カモ類」の見分け方・特徴など、紙絵を用いてのわかりやすい解説。私はもちろんの事、子供達も良く理解出来、幹事の方々のご苦心を改めて感じ、感謝致しました。

どこにでも？見る事の出来るコガモ・オナガガモ・ヒドリガモなど、数え切れない程いるマガモの大群に隠れ、なかなか見つけることが出来ないでいる時、マガモのメスにしてはおかしい、一瞬コケワタガモの雌か？と、じっとプロミナを覗く。しかし時間が経過しても、一向に潜水しない。でもマガモの嘴でもない。

確認して戴こうと、小林（成）氏、末崎氏等に声を掛けた、プロミナの視野から移動してまた捕らえる。「さっき見たやつとは違う」「これはマガモだ」なかなか一度見つけたやつが捕らえられない。ようやく捕らえては見たが、同じやつかどうか疑問が残る。それらしきやつを末崎氏に確認戴く。

「マガモと何かの雑種？」か。

探鳥開始前はヒシクイ・マガン共にほとんどいない。どの位給餌場から戻ってくるのか、期待と不安の中9時30分頃であったらうか北東方向から約250羽のヒシクイが戻って来た。と間もなく吾われの背方、南東方向に同じくヒシクイの大群が迫ってくる。

ロシアでの赤い首輪（標識）を着けているのも多くいる。「1Y5」よく読み取れる。

ヒシクイ：マガン＝2：1位か、これだけの数があると、種別には絶好のチャンスである。私の好きなミコアイサもいた。カワアイサの雌も見つけた。

終わりに近づいたころ、オオタカも飛来した。鳥合わせの最中にフィナーレを飾るが如く、ノリスも姿を見せた。

流れ解散となり、半数以上の方が帰路に着い

た頃、なかなか帰る決断がつかぬまま腕時計を見ると11時40分、朝飯が早かったせいか急にお腹が空いてきた。

対岸の丘陵地（レークビューC.C.）では、ゴルフのプレーを楽しむ人達がいる。

一頃問題となった農薬問題は？雨で流れ出たゴルフ場の農薬が、「ここ朝日池に悪い影響が無ければ良いが」いらぬ心配をしつつ、帰路についた。



ヒシクイ (写真 佐藤吟一)

鳥合わせの結果 9:00～11:00 快晴16℃  
カイツブリ、ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、マガン（580）、ヒシクイ（1050）、オオハクチョウ（14）、コハクチョウ（11）、マガモ、カルガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、ミサゴ、トビ、オオタカ、ノスリ、キジバト、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ツグミ、ホオジロ、カシラダカ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシボソガラス

合計7目15科41種

探鳥会報告

冬季海鳥探鳥会

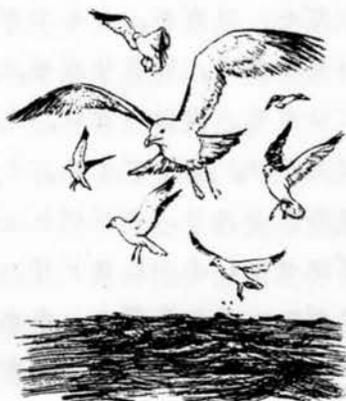
—寺泊探鳥会(2月7日)—

事務局

寺泊の探鳥会も今回で14回目を数え、確認された鳥ものべ71種に上り、支部の中でも歴史のある探鳥会となりつつあります。

当日は珍しい程暖かく、とても厳冬期の日本海とは思えない程の天候でした。あいにく途中から雨が降り出すコンディションの中、参加者29名は、白と暗緑色のコントラストの鮮やかなウミアイサの群れや、美しい夏羽に換りつつあるカンムリカイツブリ等を見ることができました。

(観察された鳥) ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、マガモ、オナガガモ、ウミアイサ、トビ、ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ツグミ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、計22種。



真冬の新潟平野に

ケアシノスリ飛来

岡田成弘

前夜に激しい雪が降り、気温の下がった2月14日は明け方に氷の張る寒い日だった。フィールドの西蒲原の水田を調査している時であった。1羽のタカが白く輝く山々を背に飛び、ホバリングを繰り返し行いながらこちらに近づいてきた。ノスリに似るがそれより長めの翼の下面は白色部が多く、黒色とのコントラストが強い。上面は初列風切基部の白い大きな斑紋が目立つ。ケアシノスリであった。北西の風に向かい飛行を続けた後、草原に降り立ったその目は金色に輝いていた。

1993年2月18日~28日まで味方村~黒埼町で観察された。



(写真 岡田成弘)



(写真 佐藤吟一)

発行	1993年3月31日	No.35
発行人	大島基	編集者 小林成光, 末崎朗
	日本野鳥の会新潟県支部	
事務局	〒951 新潟市東中通1番町86番地28	
	☎025-229-2018	本間由紀子方 <振替> 新潟1-6002